VI. 札幌医科大学付属図書館

— 旧聞・図書建築始末記 —

木田橋 喜代慎*

緒 論

東大・慶応・阪大・九大
その他の新改築の医学図書
館で、館員も相当多い一流
クラスは別として、せいぜ
い 10 名以下の職員の小図
書館では、A業務はSが、
B業務はTへ、といった式
の業務をそれぞれに応じ
て配分した合理的な運営は
とても望めるものではな
い。一応分担はあるにせ
よ、各員一業務に専従できるはずはないか
ら、その繁簡に応じて相い協力して処理して
行かねばならないのが小図書館の状態ではな
いだろうか。

しかしその反面、持って行き方によっては
相当高度(?)なものへと進展して行く可能
性もあるので、図書館の建築に際しては、こ
んなところからも一つの考え方が出てくると
思う。

建 築 の 条 件

- 1) 昭和 29 年に概算要求 (大体の図面添付)
昭和 30 年 2 月決定, 昭和 30 年度中に外廓
を仕上げ, 昭和 31 年 6 月竣工とする。
- 2) 在来の建物に接続させた 22.75×15.9 m

(第1図A) 位置図

の長方形。(上図参照)

- 3) 在来建物と同様に 3 階建。ただし一・二
階を図書館、三階は講堂とし、講堂の設計
は図書館のそれが済んだ後にする。
- 4) 最終的には建築委員において審議するが
図書館の部分は、館側に任せる。
- 5) 工費は、内部設備を除いて講堂とも三千
六百万円 (当初四千万円、一割を他の建物
に流用)。講堂の椅子およびブラインド、そ
れに図書館としては、光熱水工事、ブライ
ンド、書架、カウンター等がこの工事費に
含まれる。

設 計 経 過

大体の図面も、直ちに出来上ったわけでは
なく、数次の要求、各部の計画と、そのたび

* Kiyonari KIDAHASHI

に方眼紙へ数限りなく書きつけられたものである。

本学は道立であり、当時、道庁衛生部の所管に属していたが、建築は道建築部工営課の直営工事であり、細部については、同課主任技師と設置部局との交渉により、予算を勘案して決定された。当時のK技師が担当していなかったら、少なくとも現在のような形にならなかったと思う。

他の建物との関係

上述のとおり比較的恵まれた条件にあったにしても、単に図書館だけの問題ばかりでなく、位置、予算、将来、といったいろいろな条件が重なって来る。

事務当局としては、東側へ単独に入口を設けるか、あるいは西側の在来建物を入口とするかは、図書館側に一任していたが、旧校舎（木造）の改築も一応考慮に入れるべきであるとして、次のような条件を打ち出した。

- 1) 将来、学内の木造建物を改築する場合、大学の建物の一翼として中央部建物となるべきことを予想し、北側に廊下を予定しておく。これは、建物全体の 15.6% のスペースがとられることになり、非常に痛手であったが、あえて廊下を設けた（第1図B参照）。

そして将来、木造部と接合させる場合（改築または、そのままでも）は二階の廊下だけを延長してピロティ式の回廊とし、一方、阪大中之島図書館のように中庭への通路も考える（動物小屋、水洗便槽あり）。

- 2) 西側の在来建物との接合部分は、廊下伝いとし、東側に入口を設けて、さらに南側にも小入口をつける。
- 3) 閲覧室は二階におく。他の建物が近接しているため、採光と眺望（近くに便所あり）を考慮したことと、当地は風が強いので砂塵を避けたこと、また、3階建の間でも

あることなどが、その主な理由である。

設計のポイント

設計の中心となった点を述べると、

- 1) 書庫を事務室・閲覧室に近接させる。
- 2) 閲覧業務とカウンターとの共存。

この二点は、新築されても人員の急増は望めないのが一般情勢と考え、できるだけ図書と人とを接近させる。

- 3) 今後の図書館の進展に伴う各種の変化、もしくは拡張、場合によれば、別のところへ移転などの際に建物を何にでも流用・転用できるように、当時盛んに問題になっていた“modular planning”からヒントを得て、コンクリート壁を避けた。従って、本館にはコンクリート壁が一個所もない（増築分はブロック建）。
- 4) 南側は明る過ぎるぐらいだが、北側は、窓に接して廊下をとったので、奥行 15.9 m の建物の内部へできるだけ光を入れるためにガラス張りとする。
- 5) 全体の面積が狭くて書庫内にキャレル等を設備する余裕がないので、南側に何等かの形で閲覧スペースを設ける。
- 6) 館員の休憩室的なものを設ける。
- 7) リフトの用意。
- 8) 外装より内装に重点をおく。

各 部 の 概 要

当時としては新しいタイプの「ガラス張り」を採用し、従って、間仕切りにも全部ガラスが使われている。すなわち、廊下・館長室・会議室は8分銀モール張り、書庫・事務室は8分モール張りとし、周囲の枠は、当初鉄枠を計画したのでを予算の関係で木製にしたが、結果としては木枠で良かったと思う。

閲覧室（第2図、第3図）：南側の窓にブラインドをつけ、閲覧机照明用に、床コンセントを設けた。南側一隅には、22.75 m² の

(第1図B) 図書館平面図

学生参考書コーナーをつかって、自由に接架し得るようにした。閲覧室には、現在カード箱4台を置いているが、もう少し多くなったら廊下に移す予定である。廊下もなるべく利用できるようにと、ラジエーター4基を設備

し、ソファ2脚と新聞架、机などを置いた。なお、学生の全学的な写真・絵画の展覧会にも、閲覧室の壁や間仕切りを適宜利用している。

カウンター (第2図の右奥に、一部が見え

る): 少なくとも係員を4名ぐらい配置するように、普通より大きなものを設け、ここで閲覧関係の業務が処理できるようにした(カウンターの高さは、事務机なみの76cm)、というよりは、せざるを得なかった。また、三階の書庫の一角も閲覧業務の一部に使用している。カウンターには電話機を置き、ここの係員は、一般閲覧、レファレンス、複写業務教室備付図書の引き渡し、カード目録のファイルなどを担当している。

書 庫(第4, 5, 7図): 各入口はカウンターと直結するように配置し、事務室や廊下に面した部分は、前述のようにガラス張りとした。積層式で3層。天井高は、一・二階とも224cmで、三階だけ梁まで183cm、天井まで246cmとなっている。床は鉄板のアスタイル張り(書棚の直下は吹き抜け)。換気孔としては、三階の廊下側に回転窓を6箇所つけた。メイン通路の幅は82cmで、書架間が75cm。書架の列の心寸距離は125cm。書庫一階にラジエーター6基を取り付けた。収容、約6万冊。現在、一階が単行書、二階日本雑誌、三階外国雑誌と配置している。建築当時は、三階の書棚とリフトを予算の都合で保留としたが、1959年、China Medical Board of New York, Inc.の援助によって補充設備した。書架の塗料は灰色である。

文献調査室(第5, 6図): 書庫内キャレルを置く余裕がないので、それを補うためと

reference roomを兼ねてこの室をつくった。ここには、各種の目録のほか、いわゆるAdvances ものや Handbuch 類なども置いてあって、文献検索に使用する。

なお、一応将来のことを考えて、閲覧室の参考書コーナーとの間に扉を設けたが、普通は施錠している。

雑誌閲覧室(第7, 8図): 新着雑誌の展示室であるが、二階の文献調査室の間仕切りその他の関係で、こうするよりほかに方法がなかった、といった方が良いと思う。

学生の書庫内への出入は、全く自由というほどではないが、雑誌閲覧室(一般的な雑誌は閲覧室に20種ほど展示してある)や文献調査室と共に、希望者の申出によって、何等の手続きなしに利用させている。

事務室(第9図): 普通のスペースよりは広いように思うが、これも建物の間仕切りの関係からこの広さに落ちついたものである。

事務室には、常時執務する総務および整理課員のほかに、閲覧係の机として4台が配置され、閲覧関係業務のうちカウンターで出来ないものの処理につかっている。また輪転機、キャビネット、ロッカー等も置かれている。

館長室(第9図の右奥): 館長には教授室があるので、はじめから事務室の一部として使用することになっていたが、一応間仕切りをした。こういう名称の方が役所には通じ易いからであったが、もちろん現在も事務室と

(第2図) 閲覧室(増築部分より見る)

(第3図) 閲覧室(カウンターより見る)

して使っている。

会議室 (第9図の左奥) : 当時の情勢として、館員の休憩のためのスペースをとることは至難のわざであったので、図書館会議室とした。そして、教育、研究、事務打ち合わせ、研修等に使用しているが、昭和37年度中に102回、延べにして、1,034名、213時間の利用を見た。図書館では、館員の昼食、会合、札幌医誌編集会議、運営委員会に使っている。

(第4図) 書庫 (カウンターより見る)

増 築

昭和36年、一階東側に電子顕微鏡室が増築されたが、同年、その二階にブロック建で(第1図B)、セミナー室・ブラウジング・ルーム・複写室および同予備室等、計85.905m²をC.M.B.の援助によって増築した。(第3図, 中央の大柱より奥)

増築閲覧室 : 東側の窓を打ち抜き、柱だけを残してここに閲覧机5台を入れた。

セミナー室 (第10図) : 教科書等の輪読や討議室として、学生がグループで使用する

(第5図) 書庫 (文献調査室より見る)

(第6図) 文献調査室 (書庫三階より見る)

(第7図) 書庫 (雑誌閲覧室より見る)

(第8図) 雑誌閲覧室 (書庫二階より見る)

(閲覧室における談話による障害を避ける)。

ブラウジング・ルーム(自由読書室)(第11図):喫煙もでき、軽い読物がおいてある。

複写室および同予備室(第12図):それまで物置でやっていた複写作業をここへ移し、今後の種々の複写に備えて完全遮蔽の装置をした。

使用上の難点

すべての点で、建物の方に何とか調子を合わせていると言った方がよく、その使用上の難点を次にあげてみる。

1) 文献調査室とカウンターの接点

この文献調査室は、いわゆるレファレンスルームということになるが、簡単なレファレンスは別として、もう少し突込んだ、研究自体のことになると、tools と称しているものだけでは処理しきれないことは、皆さんの御承知の通りだが、それにしても、もう少しカウンターと近ければ、と思う。

現在考えていることは、学生参考書コーナーと文献調査室との扉を開放し、参考書コーナー北側の仕切りを取り除くことである(間仕切りは木枠のガラス張り、撤去は簡単)。こうすれば、カウンターからも近くなるし、また、書庫にも接続するから、一つの打開策ではある。

その時は、学生参考書を閲覧室の他の場所または書庫の一隅に移すことも考えられるが後者となると、オール・オープン^①の形となり果して学生がついて来てくれるだろうか。

2) セミナー室での音声

建築家と協議の上、閲覧室との境のガラスを二重にしたが、それでもセミナー室の音声が閲覧室に相当ひびく。いろいろ調べたところ、閲覧室と増築部分との天井が共通で遮蔽していないことが分った。これは、神戸医大の場合と同様かと思うが(医学図書館、10巻1・2号、p.18参照)、両方の天井の境に防音

板でもつけることを考えている。

3) 会議室との音声

この室は、初めから、ガラスが二重でなく非常に騒音が漏れるので、セミナー室の処置の後、二重ガラスに改装の予定。

4) 書庫内タイルの色彩

館内床面のアスタイルの色彩は、文献調査室と雑誌室が灰色で、そのほかは褐色であるが、前者の2室は南側で明る過ぎるぐらいだから濃緑色に、書庫は灰色にした方が良かったと思う。増築部分の、セミナー室・ブラウジング・ルーム・複写室は、それぞれいづれも淡い緑・青・黄緑のタイルにした。

結 論

以上がその難点の重なるもので、ほかの細かいところは、見付けるたびに次つぎと手を加えているが、当分、これで良いということはありません。

書庫もだんだん狭くなり、不必要な本の払い出しを考えているが、現在の場所は病院から少し遠いので、東側の学務部の木造建物を改築する時には、できれば移転してとも思っている。その場合でも、書庫の書架は、一応基礎工事を施してあるが、ほとんどナット止めであるため解体は簡単(?)に行くだろう。(追記)

当館の新築は、すでに七、八年前の旧聞に属することで、編集子が求める「新改築」うんぬんのテーマには合うべくもないし、また期日に追われて本旨から逸脱したところもあるが、今後新しく建てられる場合に多少でも参考となれば幸いである。

なお、プランニングの上で非常に役に立った文献を、末尾に掲げておく。

(附I) 工事概要

工事:昭和30年8月28日着工、昭和31年6月23日竣工。

構造:3階建(一・二階—図書館、三階—講

堂) コンクリート造, 外部モルタル吹付。
 工費: ¥30,500,000 (書架及び講堂を含む)
 (書架) ¥5,000,000 (書庫3層分の支柱と
 床のみ。棚板等は別)
 総面積: 延 932.367 m²
 (当初建築部分)

閲覧室……………122.850 m²

学生参考書…… 22.750 m²
 コーナー

文献調査室…… 48.000 m²

雑誌閲覧室…… 48.000 m²
 書庫……………349.450 m²
 会議室…………… 38.675 m²
 事務室…………… 83.175 m²
 館長室…………… 22.750 m²
 その他……………110.812 m²

(増築部分)

閲覧室…………… 28.665 m²

セミナー室…… 18.630 m²

ブラウジング
 グ・ルーム…… 13.320 m²

(第9図) 事務室

(第11図) ブラウジング・ルーム

(第10図) セミナー室

(第12図) 複写室

複写室……………17.460 m²複写予備室………7.830 m²

(附Ⅱ) 参考文献

- ◇ Bean, D. E. & Ellsworth, R. E.: Modular planning for college and small university libraries. 1948. Privately printed by the authors.
- ◇ Hanley, E. R.: College and university library buildings. Chicago, Amer. Libr. Ass., 1939.
- ◇ Wheeler, J. L. & Githens, A. M.: The American public library building; its planning and design with special reference to its administration and service. Chicago, ALA, 1950.
- ◇ 古茂田・柘植・江崎: 学校, 図書館。(高等建築学 第20巻, 建築計画其の八), 常磐書房, 1942 (第4版)。
- ◇ 建築学大系 34 (コミュニティセンター・図書館・博物館・美術館)。彰国社, 1963。

外国雑誌のご案内

1
9
6
4
年
の
創
刊
誌
か
ら外
国
雜
誌
部 **Journal of Neurological Sciences** (Holland)*Bimonthly*, Elsevier

年間予約価

¥ 6,800

本誌は、1963年末で刊行を中止する“World Neurology”に代って創刊される“World Federation of Neurology”の機関誌です。初号は1964年1月に発行の予定です。

Food and Cosmetic Toxicology (E)*Bimonthly*, Pergamon

18,900

Immunochemistry (E)*Quarterly*, Pergamon

18,900

International Journal of Nursing Studies (E)*Quarterly*, Pergamon

8,800

Nephron: Journal of International Society of Nephrology (Swiss)*Bimonthly*, Karger

5,800

Psychophysiology (E)*Quarterly*, Pergamon

12,600

RES: Journal of the Reticuloendothelial Society (A)*Bimonthly*, Academic Press

7,650

Seminars in Hematology (E)*Quarterly*, Grune & Stratton

4,000

Survey of Pathology in Medicine & Surgery (A)*Bimonthly*, The Williams & Wilkins

7,200

World Hospitals (E)*Quarterly*, Pergamon

6,300